

私と彼が出会ったのは、私が大学生の時だ。私は大学に入学すると同時に其のバイトへ這入ったので、彼がバイトを始めた時、私は既に三年めというベテランだった。彼は這入った当初から、おやと思わせる才腕の持主だった。

接客業で重要なのは、矢張り笑顔だろう。彼は一目する限そう花やかな印象を与えないが、笑うと非常に人好きのする顔をしていた。御客と接する時、彼が笑顔を絶やすることは無い。彼の笑顔に釣られ、不機嫌そうな客が和やかに帰って行く光景を、私は屢見た。

失策も少なかった。とは言え、新人なので、完全な仕事を遂げることはできない。しかしその失策を最小限にすることはできる。彼は非常に慎重な質だった。それでいて、処理をする能力が十人並でなかった。結果として仕上がるのは他の新人よりすこし早い程度だったが、彼が慣れるにつれ、其差は歴として仕事に映ずるようになった。

私が彼に信を置くようになったのは、同僚として当然のことと思う。高がアルバイトと思われるかもしれないが、アルバイト同士でも、連帯感はある。その中の出来不出来で、或人への信頼が薄れることも、実際にあった。自から言うのは恥ずかしいし、倨傲ましいのも承知しているが、私も仕事ができる部類の人間だった。だから、私は彼が入って来たのを、嬉しく思った。

彼は至ってまじめだったが、夫は仕事に於いてで、仕事がおわれ

ば実に剽軽な質でもあった。私は冗談を解すのは現代人としての嗜であると思つてゐるのだが、彼は、この嗜をじつに堅固と具えていた。私が斯う言えば、彼は斯う反す。夫は通俗の滑稽を演じてゐる気分、私は逢つてまだ一カ月しか経たない彼と、バイト場の同僚を笑わせた。

彼も、私に対して似た様な感興を抱いて呉れてゐたものと、私は信じた。私達は、携帯電話を持たないような超俗の人ではなかつたが（又、私は其のような超俗には意味がないと推斷する、）携帯電話の繋がり、番号を置いて置いてもいなかった。私は、未だに、私が携帯電話の番号を交換しなかつたことを、誇りのように思つてゐる。その結果として、私と彼はいま繋がり、完全に失くなくて仕舞たわけだが、そんなのは瑣細な事象であるだろう。

私と彼が道を共にしたのは、僅か半年足らずのことだつた。しかし私は其半年を通常のものより、幾分か特殊なものとして記憶してゐる。左して彼終りのことを。私は彼の事を思い出す時、必ず彼終りに思い及んで、ことの当否を今も考えずにはゐられない。彼が与えた愛の損傷、あれははたして、一體どれほどの日月彼女の胸に残り得ただろうか？

憐れむこともある。

二

私と彼が私事について話し合つたのは、アルバイトの数人で行つた飲会の席がはじめてだろう。私は大学生で、数カ月先、就職活動を控えていた。私は早計彼も大学生だと許思つていて、彼に今年生かと訊いた。彼は瞬間苦々しい顔をして、実は、退めたんだと答えた。私は驚いた。ああ、じゃあ、フリーターか。歳を聞くと同じ歳であることがわかつた。私はフリーターに関して何らの感情も有つ

ていなかった。というより、就職活動の成果次第では、自分もフリーターだな、とさえ思っていた。

暫らくは一身上の話をした。もう一つ彼に就いて驚いたのが、彼はひとり暮らしをしているという点だった。もちろん、大学の友達で地方から出て来ている人もいた。然し彼は実家から駅で三つしか離なれていないのに、一人暮らしをしていた。理由を訊いたが、彼の答えは不分明だった。彼は恥ずかしそうに答えを籠らせた。なんだか居づらくてね。自分がフリーターなのに、養なつてもらうのも情ないし。私はフリーターになったことがないので、其の気もちが今一わからなかった。

私はなぜ就職しないのかと彼に聞いた。ひとり暮らしをするなら、経済的に其方の方が楽なのでは、という積りで聞いた丈だった。なんか、むりなんだよね。彼の答は単簡だった。おれは、長続きしないんだ。仕事も、慣れてくると、時々無性に嫌になるんだ。おれは、いつまで、ここにいるんだらうって考えちゃってさ。私は辣腕家としての彼を思い浮かべていたので、この答が彼の意外な面を見せたように感じられた。

彼の仕事の出来、又会話の習熟度から、私は自信家のように彼を予想していた。しかし実際は違った。彼は何事につけ弱気、といていい程自分に自信をもっていなかった。其原因は何なのだろうと考えたが、まだ知己だったばかりの私では、無論突き止められなかった。唯彼は浮薄な話になった時だけ、明るく振る舞って私達を笑わせた。

其日はそれ限りだった。しかし私は、アルバイトで彼と同じ日に働らいた時、屹度一所に帰るようになった。彼と帰るのは楽しかった。四人程で帰っても、私と彼が重に喋舌ることが多かった。其所為で、私は今迄冗談を言い合っていた別の同僚に、不足を感じる様になった程だった。彼と私は、夫れこそ知己であるように、御互

の感覚を一致させることができた。

彼とは飲んだ日以来、突込んだ話しをする事もなくすぎた。私は別にかまわなかつた。この時は、彼が遠からず罷めること抔知らなかつたし、私は一種の信頼感に満足していた。敢て言葉にはしない軽微な依頼心。それに、酔っていたのかもしれない。然し今もう一度チャンスが与えられて、彼と心ゆく迄話ができるとしても、私は似たような中身の無い話で日々を過ごさだらう。彼とそういう話しをするのは、本当に楽しかつたから。

三

みてしまった時、へえと思つた。みてしまった、とはいつても、隠していたわけでもないのだから、罪のないことと思う。私は秋山さんが帰るのを見届けて、彼の肩を狎々しく抱いた。なんだ、秋山さんのこと、好きだつたの？ 彼は一瞬劇しく狼狽した。いや、好きっていうか、まあ。言葉を渾して、追窮から逃れようとする。

秋山さんは、女性のアルバイトで、齡は私達より一歳上だつた。見た目は、まあかわいい。とはいえ、誰が見ても美人というタイプでもない。秋山さんの勤務は、きょうが最後で、是から大学の卒業論文に集中、その後内定の執れた企業に入る日まで、暢びりするとかいう話を聞いた。私が聞いた訳ではない。比較的秋山さんと仲のいい女の子から、聞いた。

彼女は、変わった人だつた。飲会には、略来ない。多勢が嫌いとかいう話しも聞くが、真偽は知らない。夫でいて愛想のいい人だつた。仕事も出来る。しかし、帰る時は大抵一人でそそくさと帰る。私は彼女が抜けるのは痛手だなど勘定しただけで、他には関心をもっていないかつた。

白状するが、私は経験豊富というほど、女性を知らなかつた。し

かし此時で三人程の女性と肌を合わせたことがあり、女を知らないという人間と出逢うと、大体優越感を得た。彼の告白を聞いた時も同様だった。彼は、まだ女性と手を絆いだこともないのだと言った。私は優越感と共に、驚ろいた。彼は、決して悪い顔をしていないし、先もいったが弁舌も軽やかだった。二十年生きていて、(其半分以上は意味のない期間だが)女性と深く関わる機会がなかったのだからかと怪しんだ。彼は恥かしそうにむいてないんだろねと答えた。いつも、好きになる丈で、好きになってもらえないんだ。努力が、足らないんだろうな。彼がいつもの軽妙な調子でなく、そう言っているのを聞くと、私はふしぎな感情に打たれた。

彼が秋山さんの最後の勤務の日、電話番号を訊いたのも或は勇気を振り絞ってのことかもしれない。しかしそこは彼に聞いてみなかったたので、確証はない。ともかく彼は秋山さんに番号を訊いた。私はその場面を目撃し、彼の恋情を知った。正確には、恋情の一端考えたことがなかった。しかし其後の彼の話しを聞くと、そういうこともあるのだろうかと思うようになった。彼は純一だった。そのことを旨く伝えられるかは甚だ心基ないが、私は私の精神に懸けて、其事を受け合いたいと思う。

彼は秋山さんに番号を聞いて、会う約束を取り付けた。俱に飲むという丈夫のことが、彼には余程嬉しかったものとみえる。彼は嬉しそうに私にいった。別に、飲んだ丈で何うにかなるとも思っていないけど、なんだろう、嬉しいんだ。彼の笑顔は私を喜ばせた。私はまだちゃんと彼の恋情を知らなかつたので、落して来いよ、と冗談混じりに言った。彼は苦笑した。何うかな、おれには、好きって伝えることしかできないから。私は最初調戲っておきながら驚ろいた。秋山さんのこと、好きなの。私のこの発言に、今度は彼が驚ろいた。好きだから、番号訊いたんじゃない。私は女の子の番号を

聞くというとくに重味おもみのない作業と、恋情とが結び付けられなかつた。

彼は自分に経験がないことを恥じていた。二十にもなつて、情けないよな。彼は言った。いま迄も、好になつた人はいるけど、俺おれ悉くことごとふられてるんだよね。だから彼女おんないたことなくて、男女の機微きびみたいなものも、分らないんだ。つき合つてる人みると、何でお互たがひの好きが重なるんだらうって、ふしぎに思う。好きな人に好きになつてもらう、此こんな難むずかしいことないんじゃないかって気が俺おれはするの。私は経験者として、彼に答え得えなかつた。私は好きか何うかに重点を置いたことがなかつた。一所いっしょにいて楽らくか何うか、面倒めんどうじゃないかを考えることならあつた。恐らく、私が恋人に嘔きやく好きと、彼の好きは、別な物なのだらうと思つた。私は道徳者でないのでそれを慙あはれることはしなかつた。但た彼への優越感ゆうえつかんは溶けて消えていた。

彼と話すのは面白かつた。私と彼が別種べつしゆの人間にんげんなのだと分ると、興趣きんそくは益増ますした。私は彼の恋情れんじやうを応援えんげいした。旨うまく行けばいと心から思つた。彼と彼女が飲んだ次の日、私達は共にバイトに這入はいつていた。

四

彼の興奮きんぷん振りぶりは私を愉快うきげきにさせた。只ただ、最もう、うれしくてさ。話しながら彼は赧はれた。俺おれは、受け容ゆるめられたこともないんだ。ずっと入口いりぐちにも入れなかつた。或意味ある、俺おれが今迄今まで好きになつた人はちゃんと俺の気もちを拒否きひしてくれた訳わけだけど、矢やつ張りはべらかつた。適当たてあてにつきあつたりされより増まだと思つたけど、好きな人ひとを、好きでいれないのはつらいから。彼が話すのをきいて、私は身中みんちゆうにうれしさが充みちた。

彼と彼女の会合は、成功におわった。とはいっても、二人がつき合う杯なごの、明瞭な結果が出た訳ではない。彼は二人で飲んだ最後、彼女に好きだと告げた。突然こんなこと言われても、俺のこと好きになれる訳はないと思う。だから、これから二人で遊ぶ内、もし好きになってくれたら俺は凄く嬉しい。俺のことは絶対に好きになれないっていうならここで諦あきらめるよ。でももしそうじゃないなら、また二人で会ってくれないかな。彼は誠心せいしんを露出ろしゅつにした。

彼女は少し悩んだ。然し、私は未M君（Mとは彼のことだ）の事こと可よく知らない。だから、これから、知って行きたいな、と嬉笑ほほえんだという。

彼は有頂天になつた。好きな人に、好きっていえる事が、こんなに嬉しいとは思わなかつた。俺おれは幸福だ。彼氏じゃないし、好きになつてもらえてもいけないけど、好きだつて、あの人にいいえるんだ。彼は夢中で喋舌しゃべつた。

彼は次の約束も取付けた。映画にいくという。私は、彼の上機嫌うきげんを語るのが忍びない。彼は、其映画に行った日、彼女と又種々な話いろいろをした。中には、クリスマスのお話も出て、彼は一所にすごせないかと聞いて見た。案に反して彼女は即座いっせいいよと答えたという。え、いいの？ 思わずきき返して仕舞しまたという話を聞いて、私は笑つて了しまつた。彼氏じゃないのに、という気持きもちがあつた為ためなのだろう。しかしそれどころか彼女は、今度は彼の宅に料理を作りに行きたい、と申し出たという。殆んど自炊じしゆをしない彼は一も二もなく賛成した。俺のあの殺風景な部屋に、女の人があるなんて考えたこともなかつた、と彼は私に言つた。

私は彼の喜びようを目の前で見ている。始めて、好きな人に好きになつてもらえるかもしれない、と期待や実感を込めて吐露とろしたのも、私は聞いた。然し此話この話の続きを知つていく中に、彼が無批判に相手を受け入れすぎた、と難じる人も中にはあるかもしれない。私

は左右は思わない。彼は只純一であつた丈だ。彼は只自分の心を一部分も秘さなかつた丈だ。だから彼の心が彼程傷つけられたのは、彼に非があつたというよりも、事実として当然の論理があつただけのことと私は思う。

其日私は彼とバイトに出て居た。彼は全たくいつもの調子で、なにか変事があつたとは全然思えなかつた。帰る段になつて、私と彼が二人になると、彼がきよう飲まないかと突然誘つて来た。私は特に異存もなかつた。私達は居酒屋に這入ると、彼が実はと現状を打明けてきた。三日間、彼女から音沙汰がない。約束していた彼の室で料理を作るといふ件に就いて、三日前に彼が彼女に折簡を送つたという。バイトの予定が立つて、俺はこの日が空いてるけど、秋山さんはどう、と質問した折簡だつた。しかし丸一日以上、返事が返つて来ない。彼は奇体しいな、と思ひ電話を試してみた。出ない。彼は段々と不安になつた。まさか、事故にでも会つたんじゃあ。彼は墓蝦らしいと思ひ乍ら不安を払うことが出来なかつた。折簡が返つて来ないだけでなく、電話をした事に対しても、また丸一日以上何の応答もなかつた。彼は不安を募のらせた。もし、事故にでも遇つて、なにかあつたら、俺は何うすれば宜いんだ。家の場所も、電話も知らないで、俺は彼女に何が出来る。彼は悩んだ。彼の憔悴した様子に私は驚いた。バイトの時の常態とは懸け離れていた。携帯電話つていうのは、何でこんな軽いんだらう。便利なだけで、いざつていう時、なんの力にもならないじゃないか。私は悲観の熄まない彼に、取敢ず、もう一度電話を掛けてみなよと勧めた。彼はじゃあと席を立ち、直に戻つて来た。やつぱり、出ない。彼は進退が窮まつた人の様に立ち竦んでいた。どうしよう、奇体しいだろう、彼は青ざめた顔で隻語いた。私は彼を慰藉めた。なにか、事情があるのかも知れない。携帯を何所かに忘れてるのかも知れない。そう言う、そうだね、まあ、待つしかないかと彼はもらした。

その内一通のメールがきた。彼女からだだった。「ごめん、彼氏が出来た」という内容だった。クリスマスとの約束をして、彼の家にくる約束をして、一週間もたつていなかった。重ねられた「ごめんね」という語に、彼は呆然として自失した。……

五

其次に彼と会ったのは、二日後だったが、彼はバイトのあいだも至つて普通だった。しかしあれ程憔悴していながら、常態を装おえる彼を一度見たので、私には彼の心情が判断出来なかった。私は彼と会わない間、彼の「始めて好きになつてもらえるかもしれない」という言葉を何度か思い返した。夫には彼の表情も伴なつた。私は苦痛を感じることもなかったが、ただ彼が今どうしているだろうと考えた。

直後にバイトの飲会があつた。矢張り苦しかったのだろう、「失恋しちゃつてさ」と彼はバイトの同僚に冗談めかして話した。然し秋山さんは元このバイトということで、一応名前は伏せた。秋山さんと接触があつた事を知つていたのは私丈なので、私は黙つた。彼は秋山さんの下の名前のイニシャルから、Kさんとして顛末を話した。女の子は非どいと同情する子もいた。おれの友達なんて、もつと非どいよと慰さめなのだろう話をする人もいた。

その話をする彼は痛々しかったが、夫でも当夜の動揺振よりは増だった。おれの、此やり方が間違っているんだろう。彼は青ざめた顔で酒を呷つた。好きつて突然いわれるのは、重いんだろうなとはわかつてるよ、でも、俺にはこのやり方しかできない。世間並のやり方にしたつて、世間並の恋人しかできないじゃないか。世間並の恋人とつき合ひ、世間並の恋人を求める私は彼に掛ける言葉がなかった。彼は独語やいた。俺は、至誠に従いたい丈だ。相手におし

付けるんじやなく、相手に只実意をみせることに困って、自分の至誠に悖りたくない丈だ。俺がいま迄此やり方で傷かなかったのは、単に運が好かつたんだらう。ああ、でも、此んなに蠶蝦にされるなんて、想像したこともなかつた、……彼は又酒を銜んで、ばかだから、ばかにされる丈かと独語いた。

彼に非があつたのか何うかに就て、私は余まり考えない。そういう見方をすれば、だれかに非がないこと扨略有得ないだらう。彼はやり方をまちがえた。そして夫は彼も承知していた。然し夫でもやり方を変えないということなら、夫は彼の随意だらう。私はただ彼をみていた。しかし、それでも私は彼が拳を固めていたことにきづかなかつた、……

飲み会の日に独言をもらすこともなかつた彼は、明るく冗談もいった。女なんて他にも一杯いますよ、と慰安にならないことを言つた後輩にも、左うだ左うだと力を込めて同調した。其内、一人の女の子がそうだと声をあげた。今度、一寸遅くなつちやつたけど、秋山さんの送別会するんですよ。Mさんも、よかつたら来ませんか。この言葉に私がビクリとした。彼女は秋山さんが当事者と知らないとはいへえ、なんと問の悪いことを言うのかと思つた。しかし彼の反応は素早かつた。否々、失恋した男が行つても白けるだけだつて。やめといたほうがいいよ。私は彼の顔が瞬時も変らなかつたのに驚ろいた。彼は、もう自分の中で整理をつけてしまつたのかとさえ怪しんだ。女の子は答えた。えー、でも、こういうのは吐き出せる時に吐き出しちゃつた方がいいですよ。まあ送別会は来週なんで、気が變つたら来て下さいね。彼は笑い乍らまあ考えとくかなといった。送別会には私も誘われた。ほんとは少人数でやる積だつたんですけど、MさんとOさん（之は私の名だ）なら問題ないですよ。参加する人をきいてみると、確にみな秋山さんと比較的仲のよかつた人達だつた。私は、やだMが行かないなら俺も行かないと、姿を造つ

て駄々をこねた。突然の恋人気どりなんなの!? しかもちよつと重い感じやめてとMは私を突き離れた。皆が笑った。私は不意になんて安い道化なのだろうという思に擒らわれた。それにMを巻き込んだのだという思が、なぜか始めてした。

その飲会はその儘終った。私は彼と話す機会もなく別れた。だから数日後、彼が送別会にやはり参加したい旨を告げたのを聞いて、彼の心が何んな変転をとげたのかを今も想像することしかできない。

六

送別会の日迄、私は彼とそれほどバイトの日が重ならなかった。同じバイトの日になっても、深刻な話をする機会はとくになかった。私は後から此一週間程の空白を想像して、或は彼は一人きりの室で苦悶を反復えしたのかもしれないと考えた。天為の儘の愛情を、彼女の気随に因つて損なわれた。私の想像は貧相なものだった。しかし散々期待させられた挙句、彼氏を作つて逃げられたという解釈でなら、屈辱という名を与えて私にも理解ができた。

彼が参加することになつたので、私も加ふることになつた。私はそれとなく彼に平気なのかと訊ねた。彼は、まあ、そうだねと苦笑する丈だった。彼の様子にとくに気負つた所はなく、私も彼の変心なさして重大な意味はもたせなかつた。其頃は私も自身の女性関係に故障が生じていて、其所まで突込んで彼のことを考える余裕もたなかつた。だから私は、彼の心意を察することもなく、程経ずして送別会の日を迎えた。

私は彼がどのような応対をするのかと、最初は阻和々々していた。もし険悪な氣氛になつたらどうしようと氣を揉んだ。しかし、彼は融和的な態度でこの場に臨んだ。最初に彼を見た秋山さんは顔を硬張らせた。彼が来ることは、矢張聞いていなかったのだろう。一

瞬、幹事をやっている女の子に目を走らせた。彼は莞爾として言った。お久し振です。急に参加することになっちゃってすいません。彼女は、とりあえず笑顔を作り、ああ、いいのよ、大丈夫、といった。

彼女からしたら、謀議の末此送別会が設けられたのではないかと、疑がつても而るべきだろうと私は思った。しかし実際は彼と彼女の関係を知っているのは私丈だし、女の子の一人はまだ一か月だけど、全然会ってない感じがする。元氣してたと心から再会を喜んでいた。

私は居酒屋へと移動した。人員は六人で、六人は整然六人掛のテーブルに収まった。私は片側の真中にいて、其隣りにいる彼は、秋山さんと対合になった。皆な意図もなく座った丈なので、秋山さんと対合になったことになった彼が不幸なのか、夫れとも彼と対合うことになった秋山さんが不幸なのかと私は考えた。然し考え様によつては、皆なで話している時お互を視界に入れずに済むのが、まあ便宜といえれば便宜だろうとひとりで納得していた。

最初、秋山さんは彼と目を合ささないよう力めているようにみえた。話しの流れで、彼と語の遣取りをする時も、横目でちらりと目を合せる丈だった。しかし酒が進むにつれそれも和らいで来たようだった。彼は固より明るかった。その彼の態度が、幾分かでも安意を与えたのだろうと、私は思った。最初はぎごちなかった笑いも、彼が冗談を連発することで、段々手放で笑うようになった。

機が熟したと見たのか、彼女と仲の可愛い女の子が、そう言えば、秋ちゃん、ね。と含みをもたせた発言をした。外の子がそれに喰い付いた。なにに、どうしたの。秋山さんは、あまりいい顔をしていなかった。私もいい予感はしなかった。女の子は案の通り、彼氏、できたんだよねと告発した。

えー、いつの間にーと一人の女の子が歓声をあげた。私と彼でな

いもう一人の男の子が、なになに、何んな人っすかと割って入った。話しが盛り上がりそうになつたので、なぜか私は焦り己も、彼女できたんだよと叫んだ。焦つた儘続けた。まあ、嘘だけど。なんで嘘ついたの!? 彼が隙かさず間の手を入れた。っていうか、元々お前は彼女いるだらう。私は是で本式に会話が發展せずすみはしないものかと、内心冷々した。

私と彼が平常もの調子だからか、彼女はそれほど平調を崩さなかつた。ただ、うん、まあ、と答えただけで、話はやがて外方へ流れて行つた。私は安堵したが、私はなにを此んなに惧れているのかと怪しんだ。すると、彼折簡が来た日の彼の様子を思い出した。私は、もしかして、彼が傷つくことを恐れているのではと思ひ出した。然し真相はわからなかつた。私はトイレに立つた。

私は彼がすでにトイレにいつていたことに、トイレのドアの前に来て気づいた。此所のトイレは個室で、一人ずつしか這入ることができなかつた。私はドアの前で逡巡した。彼が出て来るまで、まつか。其中、中でゴツンという音がした。怪訝に思うと、亦ゴツンという音がして、衝撃が糸かに伝わつた。壁を殴る音だと心付いた。其所で聞き耳を時てると、中から「糞……」という声が聞えた。私は用を足さずにテールに戻つた。彼は固より酔つていた。左して私も。みな、上機嫌にみえた。トイレから戻つた彼は尚のこと上機嫌だつた。私は彼のことを正視するのに堪え得なかつた。再びトイレに立つと、近いっすねと、後輩の男の子が私を戯言つた。

七

宴は竟りに近づいた。終電までにはまだ時間があつたから、この次ぎにどこにいくかという相談になつた。カラオケ、ボーリング、また飲屋といくつか案が出たが、確定はしなかつた。そうこうして

いるうち、又話しに華が咲いた。

私達を誘ってくれた女の子が、思い出したように彼の話を振った。そう言えば、秋山さん、聞いてあげてくださいよ、Mさんの悲しい話。後輩の男の子が喰い付いた。そうそう、Kさんっていう、性悪女がいてね。Kさんというのは、御前の目の前の、その人だよ！ 事情を知らないとはいえ、軽薄に話しを盛り上げようとする後輩に、私は内心で叫んだ。

いつもの彼だったら、いやいやと言いやつら何としてでも其話しに入るのを拒否したのではないかと私は思った。しかし、彼はこゝこして誰をとめる気色もみせなかった。秋山さんの顔は、不穏な予覚を感じたのだろう、僅かにだが曇った。私は白状すると無能な様だが、どうしていいか分らなかつた。先程の様に強引に話を杜絶させるには、機を失していたし、何方にしろ酔いが思考を妨たげていた。私はどうしたらいいものか分別がつかなかつた。私は恐る恐る彼を見た。

彼は徐ろに立ち上った。音もなく立ったので私は驚倒いた。彼は真直秋山さんに指をさした。「おれの好きな人は、秋山さんだ」

私は語を失ない、彼女の顔は硬張り、彼は普段の儘の笑顔を湛えていた。私は、彼にとつての笑顔とは、自分が知覚できないようなほんの少しの意思で発現してしまふほど、容易なものなのだと思つた。私はこれまでの彼の人生を思つた。あの自信のなさを思つた。しかし私には何事も知り得なかつた。只彼は彼女のほうへと歩を進めた。彼女は身を竦め、然し目は彼から離せないようだった。

彼は彼女の頰を掴んだ。そう荒々しい感じでもないが、ここからでは力加減は分らない。彼は一度深呼吸して、笑顔を引き込めた。左右して言った。「俺はきょう、貴方に復讐に来た」物騒な言葉が、一瞬店内を寂とさせた。

「おれは貴方を、許さない。貴方は俺の愛情を、不様な俺の中で唯一の純一なものを、傷けた。何で期待させた？ 何で拒否しなかった？ 何で、俺から逃げた。俺の愛情から貴方は逃げたんだ。それが一番残酷な遣口だってきづかずに。」

彼氏ができたんなら、なんで夫を俺に説明しなかった。期間が短かかったからか？ おれを傷けると思ったからか？ ちがうだろう。愛のためなら、すべてを犠牲にしても、しかたないだろう。なんで俺にメールを返さなかった。会って事情を説明しようとしなかった。俺が電話しなきゃ、貴方は其儘のうのうと彼氏と仕合せな時間をすごしていたっていうのか。なんで何日も連絡を寄こさず、俺から目を背けつづけたんだ」彼女が思わず顔を伏せた。彼は叫んだ。「俺を見る！ 之れが俺の愛情だ。俺の不様な愛情だ。貴方が傷けたものの、是が正體だよ。俺は自分の中の、好きっていう気もちを、唯一の純粋なものを、無視されたんだ。愛の犠牲にされたんじゃない。ただ、ないものとして扱かわれたんだ。なんで貴方の愛の犠牲にしてくれなかった。なんで傷けるなら、もっと正面から傷けてくんなかった。彼氏のこと好きなんだろう。だからつき合ってるんだだろう。だったら、正面から、愛の邪魔になるものを取払わなきゃ仕方ないだろう……」

私は彼をとめべき立場にあった。私はそれを自覚していた。しかし私の體には動く気色が感じられなかった。私は彼の顔をみていた。左うして彼の振り下す鉄槌の音を聞いた。彼の好きと、私の好きがちがったように、私の屈辱と彼の屈辱もまた同じでないのだろうと私は思った。彼は続けた。

「此様なのは、意味のない、復讐だって分かっている。でも俺は貴方に復讐がしたかった。せすにはいられなかった。そうしなきゃ俺の好きがどこにも出ていかねえんだ。貴方に堰き遏められた気持が、俺の中で暴れて気が狂いそうになるんだ。俺は道化だから、どこに

いたって、笑っていることはできる。でもそんなのは俺じゃねえんだ。貴方を好きな気持ちだけが、俺の本当だったんだ。俺の本当……もう、なんの意味もないもの……」彼女が泣き始めたのをみて、彼は失速した。彼女の首から手をはなした。「こんなんになっても、貴方とまだ続きがあるんじゃないかなんて、考えることがある、——笑えよ。始めて女の子にふれる時は、最度優しくしたかったなんて、いまも考えてる……」彼はポケットに手を入れ、財布をとり出した。その中から紙幣を無雑作に攫むと、テーブルの上に置いた。「みんなには迷惑を懸けた」一目するだけで、其額のきょうの代金より明かに多いのがわかった。彼は蕭然と場を去った。彼女は声をあげて泣きはじめた。惶て彼女を慰藉める者、放心してなにを考えているのかわからない者、事態を收拾しようと今更焦る者がいたが、彼を追うべきだったかもしれない私は、彼女の涙が、自分の不義への後悔でなく、尋常でない場面に際会した恐怖からきているのだろうと考えて、茫昧りと彼の遺した紙幣を見つめた、……

八

それから、私が彼と同じ日にバイトに這入ったのは、数回しかなかった。私は其のたびに、彼に一所に帰ろうと屹度言ったが、彼はさびしげに笑って私を待ってくれることはなかった。

バイト場の雰囲気として、彼と距離を置こうという空気ができあがっていた。当夜の話が何程の早さで滲透したのかはわからないが、私が見ついた時には大抵の人間が話を知っていた。失恋時は彼に同情的だったアルバイトの評価は、あれは重いよ、という人から、でも、なんか可哀そうだった、という人まで、各個に違う感想を与えらることとなった。

彼が罷めたのは直だった。社員の人に話を聞いて見ると、送別会

にいく前には今月限りで罷める旨告げられていたそうなので、覚悟をきめていたものとみえる。私はやめる前に彼に是からどうするかと訊いた。彼は、さあ、何うするか。就職するかもしれないし、又バイトをするかも。と答えた。

後悔してないか、彼が帰ろうとする間際を引き留めて、私は質問を重ねた。後悔？ 彼は感情の溷濁した顔をした。正直、何も分かんないんだよ。只、おれのしたことは、本当に意味がなかったこと丈はわかった。彼は私をみているのかもわからない目をして、そう言った。

彼が与えようとした愛による損傷は、あるいは彼を最も傷けたのかもしれないと私は思った。夫に引き較べて、彼女のほうはどうだろう。私には当時もいまも判断がつかない。唯、前提がまちがっているのではと思った。彼女は、自身の愛情に已なく流されて彼氏を作ったのではなく、場当りの男女の情に流されて彼氏をつくったのではないか。私は自分と其経験からでしか判断することができなかった。

彼にも夫が分つていたのかどうか。今となつては、確認する方はない。彼がやめたあと一月もせずに、私もそのバイトをやめた。就職活動をはじめたのだ。いまは、彼日から丸一年が経とうとしている。私は就職先の内定を取り、別のバイトをして日をすごしている。彼と再会したことは無論ない。彼がどうしているかという話も、聞いたことがない。抑々あのバイトの人で、今も交流がある人間がひとりもないなかつた。電話番号を知っているのに、だ。

私は、電話番号を知っている外の多くの人間より、いまは一切の絆がりをなくなして仕舞つた彼のことを、屢こうして思い出す。その原因は分らない。或は、只失つたものを求めているという丈のことかもしれない。しかし、私は彼の猛烈な愛情が好きだった。彼の処世用の顔と、愛情用の顔の齟齬が好きだった。私は彼の歪な彼

其物を、私が出会った人間のなかで最も人間らしいものと認めた。そのもの
私は最後に、大抵彼女の事に思い至る。私は拗じているので、
どうしても彼女があの日のことをどう解釈しているのかと考える。
彼女は、自分が傷つけた彼の愛情によつて、本当に損われたらう
か。筋違いの非難をされたらと、四圍に洩らしてはいないだらうか。
いや、彼女が実意のある人間で、彼とのかつての心から後悔して
いるとしよう、……然し、其傷は、もう今は癒えているのだらう、……
彼とのかつての事を思い出すこともなく、亦新しい恋人と朝を迎えて
いるのだらう……此想像は、矢張り私の拗じた性質のためだらうか？
傷が癒えるということ、私はこの一件以来恨むことが時々ある。
人は癒しを求めする必要さえなく、大抵の傷をいずれば塞いでしまう。
私は、彼が消えない傷を残したかたのではないかと想像する。消
えない、心に残した赤い傷……其結果、彼は彼女よりも深傷を負っ
た。彼が与えた愛の損傷、あれは、私にさえ累を及ぼして、しかし
彼が望んだ何物をも彼に与えなかった。